

幼稚園教諭・保育士を目指す学生の汎用的技能の実態

西田明史・坂井加奈

(西九州大学短期大学部 幼児保育学科)

(平成 23 年 12 月 22 日受理)

An investigation of actual conditions of generic skills among potential kindergarten teachers and nursery school teachers

Akihito NISHIDA, Kana SAKAI

(*Department of Early Childhood Education and Care, Nishikyushu University Junior Collage*)

(Accepted December 22, 2011)

Abstract

This study aimed to investigate the level of generic skills among students who aim to be a kindergarten teacher or a nursery school teacher. An investigation of actual conditions was conducted from late October to early November 2011. The subjects of the study were Nishikyushu University Junior College students, who are studying in the Department of Early Childhood Education and Care.

With 30 questions regarding generic skills based upon social and vocational independence, the following was found.

1. Interpersonal skills were obtained to some extent when students entered junior college. In addition, their levels of generic skills have improved through classes.
2. Techniques related to an idea of vocation were not obtained among new students. It was expected that the techniques would be acquired through college education.
3. Students had developed skills of self-expression, reading and writing, problem solving, and lifelong learning through lessons, yet the level is low.
4. Students did not perceive that they have improved techniques related to health, quantity, and information literacy.

Key word : training of kindergarten teacher and nursery school teacher 保育者養成
generic skills 汎用的技能
investigation of actual conditions 実態調査

I 結 言

近年、社会的・職業的自立の基盤となる技能および態度の涵養が大学教育に求められるようになった。

文部科学省¹⁾は、「21世紀の大学像と今後の改革方策について」(大学審議会答申)の中で、社会生活に必要な基本的な知識や技能を習得し、現代社会の諸課題に対処する能力を養成する教養教育の必要性を提言している。また、学士力²⁾や社会人基礎力³⁾、就職基礎能力⁴⁾において、大学卒業時または職場・地域社会で求められる基礎的・汎用的技能について提言されている。

社会的・職業的自立の基盤となる技能・態度を涵養することの必要性は、保育者養成の現場も例外ではない。筆者らが勤務する西九州大学短期大学部幼児保育学科(以下「本学」と記す)においても、実習を受け入れた保育現場から寄せられる要望の中に、保育の専門的な知識と技能に関するものも当然あれば、「挨拶や人と明るく接する態度」「主体的な姿勢」「助言・指導を素直に聞き入れる態度」など、社会的・職業的自立に必要な基礎技能や態度に関するものも含まれている。

本学では、保育者に求められる職業観や基本的マナーなど、社会的・職業的自立の基盤となる技能や態度について、保育実習の事前・事後指導を含む保育の専門科目に関わる授業の中で指導している。加えて、一般教育科目区分内に開講されている「あすなろう教育」科目群において、保育者養成の実情に合わせた実践的な内容が取り組まれている。「あすなろう教育」科目群の経緯をみると、まず、平成15(2003)年度に建学の精神に基づく人間的資質の涵養を企図した科目『あすなろう』が開講された。その後、平成16(2004)年度には学外の体験学習による心の教育を企図した科目『あすなろう体験』、平成19(2007)年度には1・2年次生縦割り混在クラス単位の学習による人間教育の強化推進を企図した科目『共に学ぶあすなろう』がそれぞれ開講された。さらに、平成23(2011)年度より職業人としての資質能力の育成に焦点を当てた科目『あすなろう(就業)』が新設された。これら「あすなろう教育」科目群は、『あすなろう』で学習した内容が平行して開講されている『共に学ぶあすなろう』『あすなろう(就業)』において具体化されることにより、学生の短期大学における学習や生活への適応、キャリア形成・就職支援を可能にしている。実際に、学生は、「コミュニケーション力」や「職業的教養・職業意識」の習得に『あすなろう』の授業が役立ったと認識している⁵⁾。また、『共に学ぶあすなろう』における「2年生が1年生に教える」または「1年生が2年生に学ぶ」経験は、主体的態度や社会性、共感など、学生の内面的な成長に結びつく貴重な学習機会になっている⁶⁾。

社会的・職業的自立の基盤となる技能や態度の習得を目指す学習支援は、最近では、初年次教育、補習教育、導入教育、キャリア教育の範疇においても取り組まれている。いずれにせよ学習支援の効果を高めるためには、社会的要請の変化や学生の実態の把握が必要である。つまり、学生が卒業までに身につけるべき技能等を経時的に把握し、そのデータに基づいて教授内容や方法を再考、実践することにより、高い学習成果が得られるのではないだろうか。しかしながら、本学の実情に目を向けると、社会的・職業的自立の支援に結びつくような学習プログラムには取り組んでいるものの、学生が短期大学入学までに習得している技能や態度は何なのか、どのような学習を通じて、どのような技能や態度をどの程度習得できているのか、などの実態については把握されていない。このことは、教育課程評価(カリキュラム・アセスメント)の観点からも重要なことではなからうか。

そこで、本研究では、幼稚園教諭・保育士を目指す学生における社会的・職業的自立の基盤となる技能・態度の習得度について情報を得ることを目的とする。具体的には、短期大学入学時までの習得度により高校と短期大学の接続期に必要な学習内容、および短期大学の学習を通じた習得度により短期大学と社会の接続に必要な学習内容を明らかにすることである。

II 研究方法

1. 調査対象者とデータ収集の方法

本研究の対象は、佐賀県内の保育者養成系短期大学の2011年度在学生、1年次生84名、2年次生61名の計145名であった。

調査は、2011年10月下旬から11月上旬にかけて、質問紙による集合調査法で実施した。倫理的配慮として、回答の内容が成績評価に影響を一切及ぼさないことを調査表の中に明記した。調査は、調査前に回答への同意を得られた者のみ実施した。

なお、分析は、各項目のいずれかに記入漏れや誤記のなかった者のうち、幼稚園教諭免許・保育士資格の取得を希望し、前述の免許・資格を生かした職場への就職を希望している116名(1年次生65名、2年次生51名)を対象とした。

2. 調査内容

調査内容に関しては、学士力⁷⁾や社会人基礎力⁸⁾、就職基礎能力⁹⁾を参考に、それらを包括するような社会的・職業的自立に必要な基礎的スキルおよび態度に関する30項目を作成した(表1)。作成した質問項目については、先行研究¹⁰⁾¹¹⁾¹²⁾¹³⁾と照らし合わせながら、表現の適否および内容の妥当性を検討した。

表1 社会的・職業的自立の基盤となる技能および態度

No.	質問項目	略称	学士力 (文部科学省)	社会人基礎力 (経済産業省)	就職基礎能力 (厚生労働省)
1	人の話や文章、図表（イラストも含む）の意味を解釈することができる	解釈	コミュニケーションスキル		
2	要点をおさえてメモ（ノート）をとることができる	記録			読み書き
3	まとまりのある文章を書くことができる	文章			読み書き
4	状況に応じた表現・言葉・文法を使って話をしたり文章を書いたりすることができる	表現	コミュニケーションスキル		自己表現力
5	人の意見や考えを丁寧に聴くことができる	傾聴	コミュニケーションスキル	傾聴力	意志疎通
6	自分の意見や考えを口頭で分かりやすく説明することができる	説明	コミュニケーションスキル	発信力	意志疎通 自己表現力
7	自然や社会の出来事について、数値や図（グラフや表など）を活用して理解したり、表現したりすることができる	数量	数量的スキル		数学的思考力
8	図書やコンピュータを用いて、情報を収集・整理し、適正に活用することができる	情報	情報リテラシー		情報技術関係
9	コンピュータを用いて文書や図表を作成することができる	操作	情報リテラシー		情報技術関係
10	これまでに得た情報や知識を活用し、筋道を立てて考えることができる	論理	論理的思考力		
11	現状を多方面から分析し、課題を明らかにすることができる	発見	問題解決力	課題発見力	向上心・探究心
12	課題解決に必要な取り組み・方法・手順を明らかにし、準備することができる	計画	問題解決力	計画力	
13	課題解決に向けて確実に行動することができる	実行	問題解決力	実行力	
14	これまでに身につけた知識や技能などを活用して新しい価値（アイデア）を生み出すことができる	創造	創造的思考力	創造力	
15	指示を受ける前に自分で考えて進んで行動することができる	主体	自己管理能力	主体性	
16	やるべきことの優先順位をつけたり空き時間を使ったりなど、時間を有効に活用することができる	時間	自己管理能力		
17	健康の維持・向上のための規則正しい生活（食事・運動・休養）を実践することができる	健康	自己管理能力		
18	自分感情を適切にコントロールすることができる	精神	自己管理能力	ストレスコントロール力	
19	意見の違いや立場の違いを理解し、受け入れることができる	共感		柔軟性	協調性
20	人と協調・協働して行動することができる	協調	チームワーク		協調性
21	人に働きかけて、課題解決にむけて共に行動できる	共同	リーダーシップ	働きかけ力	
22	何事にも我慢強く取り組み、最後まで続けることができる	忍耐			
23	自分から挨拶をしたり、人と明るく接したりすることができる	社交			基本的なマナー
24	先生や上司など、目上の人からの教を素直に聞き入れることができる	誠実			
25	自己の良心や学校・社会のルールに従って行動することができる	倫理	倫理観	規律性	
26	社会の一員としての意識を持ち、社会の発展のために役割を果たすことができる	責任	社会的責任		責任感
27	進んで課題を見つけ、高い目標に向けて行動することができる	向上	生涯学習力		向上心・探究心
28	状況に応じた服装や身だしなみをきちんとすることができる	服装			基本的なマナー
29	自分のなりたい人材像や目指す職業が明確になっている	目標			職業意識・勤労観
30	目指す職業に求められる専門性（知識や技能など）や役割を自覚している	職業			職業意識・勤労観

技能・態度の習得度は、短期大学入学時と現在の2時点について、それぞれ4段階評定（「とても身についている（4点）」「やや身につけている（3点）」「あまり身につけていない（2点）」「まったく身につけていない（1点）」による回答を求めた。

3. 分析

知識または技能の習得度の変化について、同一群の2時点の比較には Wilcoxon の符号付順位和検定を用いた。また、同一期の2群間の比較には Mann-Whitney の U 検定を用いた。なお、いずれも有意水準は5%未満とした。

III 結 果

表2に社会的・職業的自立に必要なとされる基礎技能および態度（以下、「基礎技能等」と記す）の平均点を示した。1年次生では、30項目すべてにおいて入学前よりも現時点の得点が高く、「傾聴」「健康」「協調」「社交」

「誠実」を除いた25項目において入学前と現時点の間に有意な差が認められた。2年次生では、30項目のすべてにおいて、入学前よりも現時点において得点が有意に高かった。また、1年次生と2年次生の差を見ると、入学時点では、2群間に有意な差は認められなかった。現時点では、多くの項目において1年次生よりも2年次生の得点が高く、「表現」や「傾聴」を含む13項目において1年次生と2年次生の間に有意な差が認められた。

入学時および現時点における基礎技能等の習得度について、横軸方向を1年次生、縦軸方向を2年次生として平均値の分布を示した（図1、図2）。

図1において、値が2.5よりも大きく（小さく）なるほど入学時における習得度が高い（低い）ことを意味している。結果を見ると、「数量」「文章」「記録」を含む11項目の基礎技能等について、1年次生・2年次生ともに、入学時までに習得した実感を得ていないことが分かる。また、1年次生において「責任」と「主体」、2年次生において「情報」「職業」「時間」「操作」の項目は、入学時までに習得した実感を得られていない。一方、「誠

表2 社会的・職業的自立に必要なと考えられる基礎技能および態度の比較

No	項目	1年次生			2年次生			差(1年-2年)	
		入学前	現時点	差	入学前	現時点	差	入学時	現時点
1	解釈	2.69 ± 0.52	2.97 ± 0.30	**	2.63 ± 0.56	3.10 ± 0.45	**	n.s.	n.s.
2	記録	2.48 ± 0.77	2.92 ± 0.64	**	2.47 ± 0.72	3.12 ± 0.55	**	n.s.	n.s.
3	文章	2.12 ± 0.71	2.51 ± 0.68	**	2.20 ± 0.69	2.82 ± 0.47	**	n.s.	†
4	表現	2.23 ± 0.67	2.52 ± 0.64	**	2.31 ± 0.61	2.84 ± 0.64	**	n.s.	††
5	傾聴	3.03 ± 0.53	3.11 ± 0.56	n.s.	2.94 ± 0.64	3.41 ± 0.49	**	n.s.	††
6	説明	2.11 ± 0.64	2.45 ± 0.66	**	2.27 ± 0.56	2.76 ± 0.61	**	n.s.	††
7	数量	2.05 ± 0.71	2.25 ± 0.74	*	2.04 ± 0.62	2.47 ± 0.50	**	n.s.	n.s.
8	情報	2.55 ± 0.82	2.83 ± 0.80	**	2.37 ± 0.82	2.76 ± 0.70	**	n.s.	n.s.
9	操作	2.68 ± 0.86	2.83 ± 0.85	*	2.39 ± 0.79	2.80 ± 0.66	**	n.s.	n.s.
10	論理	2.38 ± 0.72	2.63 ± 0.67	**	2.25 ± 0.68	2.73 ± 0.60	**	n.s.	n.s.
11	発見	2.14 ± 0.55	2.46 ± 0.66	**	2.20 ± 0.59	2.78 ± 0.60	**	n.s.	†
12	計画	2.32 ± 0.68	2.80 ± 0.64	**	2.31 ± 0.75	2.92 ± 0.62	**	n.s.	n.s.
13	実行	2.46 ± 0.70	2.77 ± 0.70	**	2.45 ± 0.69	2.88 ± 0.68	**	n.s.	n.s.
14	創造	2.25 ± 0.63	2.45 ± 0.66	**	2.31 ± 0.70	2.84 ± 0.72	**	n.s.	††
15	主体	2.42 ± 0.72	2.77 ± 0.67	**	2.55 ± 0.72	3.14 ± 0.59	**	n.s.	††
16	時間	2.60 ± 0.74	3.14 ± 0.76	**	2.39 ± 0.74	3.24 ± 0.51	**	n.s.	n.s.
17	健康	2.75 ± 0.84	2.78 ± 0.83	n.s.	2.57 ± 0.82	2.84 ± 0.78	*	n.s.	n.s.
18	精神	2.52 ± 0.82	2.82 ± 0.76	**	2.59 ± 0.77	3.14 ± 0.69	**	n.s.	†
19	共感	2.91 ± 0.65	3.23 ± 0.55	**	2.82 ± 0.76	3.31 ± 0.54	**	n.s.	n.s.
20	協調	3.11 ± 0.56	3.18 ± 0.63	n.s.	3.00 ± 0.74	3.41 ± 0.63	**	n.s.	†
21	共同	2.69 ± 0.63	2.92 ± 0.64	**	2.67 ± 0.68	3.14 ± 0.59	**	n.s.	n.s.
22	忍耐	2.77 ± 0.86	2.92 ± 0.77	*	2.92 ± 0.79	3.39 ± 0.63	**	n.s.	††
23	社交	3.23 ± 0.70	3.32 ± 0.64	n.s.	3.14 ± 0.77	3.51 ± 0.61	**	n.s.	n.s.
24	誠実	3.23 ± 0.74	3.34 ± 0.59	n.s.	3.20 ± 0.66	3.45 ± 0.60	*	n.s.	n.s.
25	倫理	3.06 ± 0.68	3.20 ± 0.56	**	3.06 ± 0.54	3.31 ± 0.54	**	n.s.	n.s.
26	責任	2.37 ± 0.76	2.63 ± 0.71	**	2.55 ± 0.72	2.96 ± 0.48	**	n.s.	††
27	向上	2.42 ± 0.72	2.66 ± 0.71	**	2.31 ± 0.73	2.90 ± 0.53	**	n.s.	†
28	服装	2.91 ± 0.80	3.18 ± 0.55	**	2.94 ± 0.75	3.35 ± 0.55	**	n.s.	n.s.
29	目標	2.68 ± 0.82	2.97 ± 0.80	**	2.61 ± 0.86	3.25 ± 0.68	**	n.s.	n.s.
30	職業	2.58 ± 0.76	3.08 ± 0.62	**	2.37 ± 0.74	3.31 ± 0.54	**	n.s.	†

数値は、平均値 ± 標準偏差

同一群の2時点における測定値の差の検定には、Wilcoxon の符号付順位和検定を用いた (* p<.05, ** p<.01)

同時期の2群間における測定値の差の検定には、Mann-Whitney のU検定を用いた († p<.05, †† <.01)

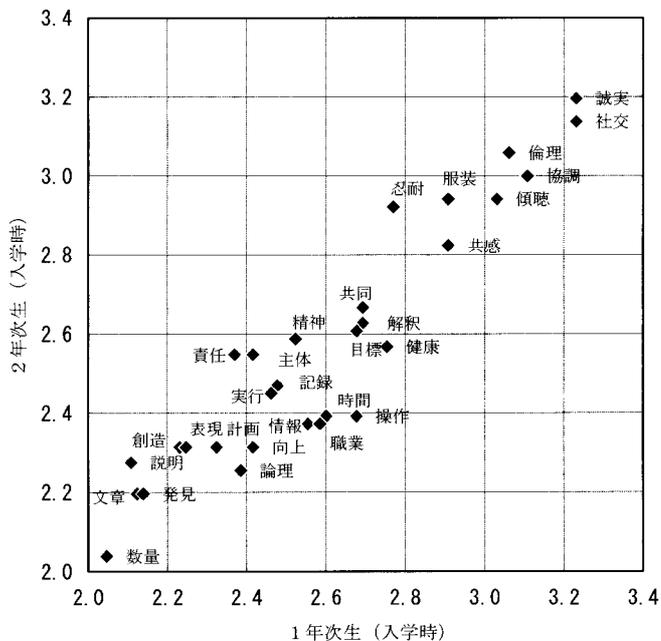


図1 技能・態度の習得度の比較（入学時）

実」「社交」「共感」を含む8項目の基礎技能等は、1・2年次生ともに、入学時までに習得した実感が得られていることが分かる。

図2において、横軸方向に値が大きくなるほど1年次の現時点での習得度が高く、縦軸方向に値が大きくなるほど2年次の現時点での習得度が高いと言える。「情報」「操作」を除いた28項目の基礎技能等は、1年次生よりも2年次生において習得した実感を得られていた。次に、入学時に習得した実感を得られていなかった基礎技能等について見ると、「数量」は、1年次および2年次の現時点においても習得した実感を得られていない。また、「説明」「発見」「創造」「表現」「文章」の5項目は、1年次の現時点では習得した実感を得られていないが、2年次の現時点においては習得した実感を得られていた。1年次生における「責任」と「主体」の2項目、2年次生における「情報」「職業」「時間」「操作」の4項目は、入学時には習得した実感を得られていなかったが、現時点では習得した実感を得られている。

図3は、基礎技能等の習得度の現時点と入学時における平均値の差に関して、横軸方向に1年次生、縦軸方向に2年次生として表した。2時点における習得度の差は、短期大学での学習成果を意味すると考えられる。図において、横軸方向に値が大きくなるほど、その基礎技能等に対する1年次の現時点での学習成果が高く、縦軸方向に値が大きくなるほど2年次の現時点までの学習成果が高いと考えられる。また、原点を通る傾きが1の直線より上側にあるほど、1年次から2年次に至るまでの学習成果が高いものと考えられる。結果を見ると、30項目のすべてにおいて、入学時から1年次生の現時点までの学習成果よりも、入学時から2年次生の現時点までの学

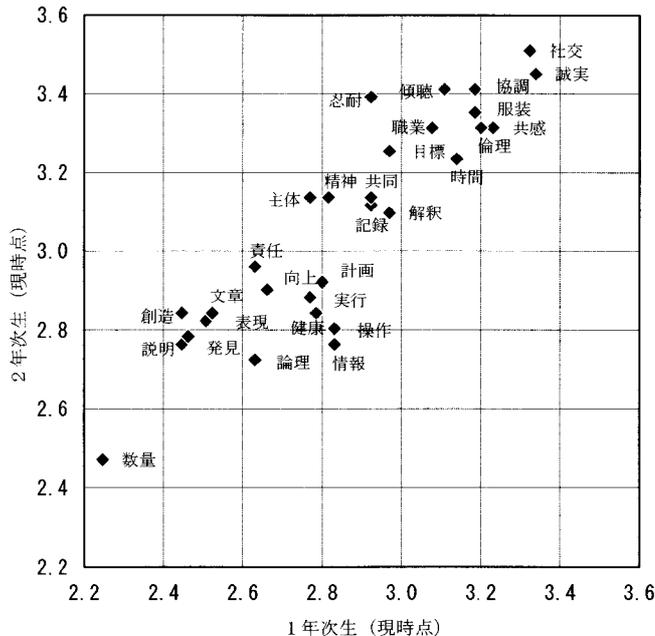


図2 技能・態度の習得度の比較（現時点）

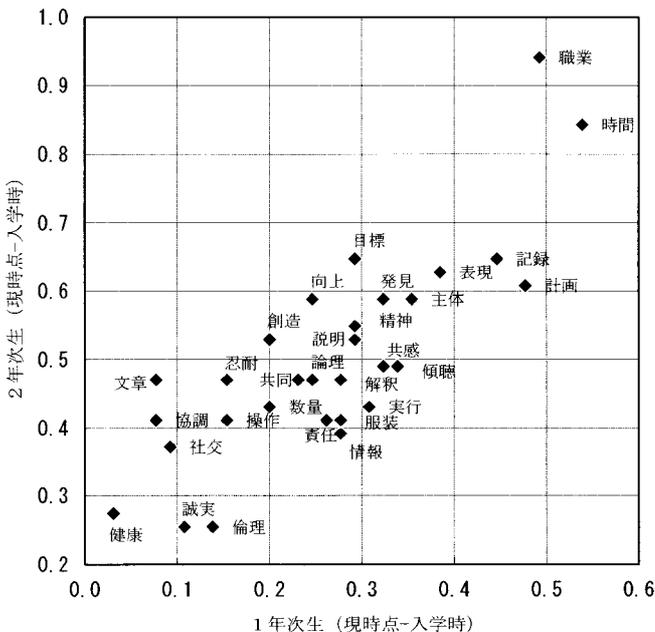


図3 技能・態度の習得度の差の比較

習成果のほうが大きい。

これらの結果より、基礎技能等を学生の視点から捉えると以下の点が指摘できる。

入学時にどちらかといえば習得していない（平均値が2.5未満）と学生が認識している基礎技能等を見ると、「数量」は、短期大学でも習得できていないと認識されている。「文章」「発見」「創造」「表現」の5項目は、1年次生の現時点までに習得されていないが、1年次生の現時点から2年次生の現時点に至る間に習得度が向上していた。「職業」「目標」「時間」の3項目は、入学時から1年次生の現時点、1年次生から2年次生の現時点にかけて経時的に習得度が向上し、2年次生の現時点において

ある程度身につけている（平均値が3.0以上）と学生から認識されている。1年次生または2年次生において、入学時にどちらかといえば習得できていないと学生から認識されていた残りの基礎技能等のうち、「論理」「計画」「実行」「記録」「解釈」「共同」の6項目は、1年次生の現時点に至るまでに習得度が向上していた。「向上」「責任」「主体」「精神」の4項目は、1年次生から2年次生に至る間に習得度が向上していた。また、「健康」「情報」「操作」の3項目は、入学時にどちらかといえば身につけている（平均値が2.5以上3.0未満）程度であり、短期大学において習得度があまり向上しないと認識されている。

一方で、入学時までどちらかといえば習得できている（平均値が2.5以上3.0未満）と学生から認識されている基礎技能等を見ると、「誠実」「社交」「倫理」「共感」「服装」の5項目は、短期大学において習得度の向上がわずかであった。「協調」「傾聴」「忍耐」の3項目は、1年次生から2年次生に至る間に習得度がさらに向上していた。

IV 考察とまとめ

本研究の結果をみると、社会的・職業的自立の基盤となる技能等に関する多くの項目について、学生は短期大学の授業等を通じて習得度を高めたという実感を得ていた。

まず、人間関係形成力に関わる技能等（「誠実」「社交」「倫理」「共感」「協調」「傾聴」）は、短期大学入学時までどちらかと言えば習得されており、短期大学の授業等を通じて習得度が向上し、ある程度習得されていた。

次に、短期大学入学時までどちらかと言えば習得できていない（平均値が2.5未満）と学生が認識している基礎技能等を見ると、職業意識（「職業」「目標」）および自己管理能力（「時間」「主体」「精神」）に関わる技能等は、短期大学の授業等を通じてある程度習得されていた。

ここで、本学での学びを具体的に見ると、学生は『あすなろう』の授業を通じて「コミュニケーション力」や「職業的教養・職業意識」を習得したと認識している¹⁴⁾。また、『共に学ぶあすなろう』における「2年生が1年生に教える」または「1年生が2年生に学ぶ」という学習経験は、主体的態度や社会性、共感などの習得に結びつく貴重な学習機会になっている¹⁵⁾。さらに、学科の学びの特色に、学生の音楽・表現技術の成果を披露する『実技発表会』と、学外者の授業参加と学生参加の授業構築という特徴を持つ『子育て支援事業（親子いきいき広場）』がある。林ほか¹⁶⁾によれば、実技発表会に取り組む過程は、演奏・表現技術の向上、教材の研究実践方法の理解につながるばかりではなく、主体的態度や創造的思考、傾聴や協働

といったコミュニケーション能力の向上にも有効であった。また、田村ほか¹⁷⁾によれば、学生は子育て支援事業に参画する中で、保育技術の向上もさることながら、子どもや保護者との関わり方、批判的思考と共感的理解なども学んでいる。

また、実習経験の効果に関する一連の研究によると、実習経験が保育者効力感の向上に必ずしも結びつかないが、それは実習経験を積み重ねることにより保育の専門性や責任の重さに直面するためだと考えられる¹⁸⁾¹⁹⁾。神谷²⁰⁾によれば、実習を初めとした専門教育は、進路選択過程としての意味も有しているがゆえに、自己や職業について考え直す機会となっている。

したがって、保育現場での実習を含む専門教育、専門教育の学びの深化につながる『実技発表会』や『子育て支援事業』、本学の学びの特色である「あすなろう教育」が、人間関係形成力、職業意識、自己管理能力の技能の獲得に結びついた可能性が高いものと推察される。

ところが、学習成果の高い技能等がある一方で、自己表現力（「表現」「説明」）、読み書き（「記録」「文章」）、問題発見・解決力（「発見」「創造」「論理」「計画」「実行」）、生涯学習・社会参画（「向上」「共同」「責任」）に関わる技能等は、短期大学の学習等を通じて習得度が向上しているものの、どちらかといえば習得できている（平均値が2.5以上3.0未満）と認識されている程度であった。しかも、「健康」や「数量」、情報リテラシー（「情報」「操作」）に関わる技能等については、短期大学の学習等を通じて習得度を高めたという認識を得られていなかった。

自己表現力や問題発見・解決力、「向上」や「共同」に関する技能等は、大学での学習成果が高い項目である²¹⁾。また、山田・森²²⁾によると、教育系学部では、正課授業と正課外活動において相互補完的に汎用的技能が獲得されていることが見受けられた。詳述すれば、社会的関係形成力や知識の体系的理解力に関わる技能は正課授業を通じて獲得されており、批判的思考・問題解決力や持続的学習・社会参画力に関わる技能は正課外活動を通じて獲得されていた。なお、自己表現力に関わる技能は、正課授業と正課外活動の両方を通じて獲得されていた。さらに、濱名²³⁾によると、学生は、作業や課題解決を含む活動、対人関係を多く含む活動、プレゼンテーションする活動など、「少人数ゼミや演習」および「友人との交流」の場面で汎用的技能の習得につながったと認識している。

さて、今後、本学が学生の自己表現力、読み書き、問題発見・解決力等に関わる技能の涵養を目指していくのであれば、教員が学生に対して一方的に教授するような講演型の授業ではなく、学生同士あるいは教員とのコミュニケーションをとりながら学生が知識や技能を習得できるような参加型・双方向型の授業が必要ではないだ

ろうか。このような授業形態は、少人数の授業ならまだしも大人数の場合では難しい。そこで、ディスカッションや発表、グループワークなどを通じて、学生の経験や意見を引き出して、課題解決に導くような授業の内容や方法について理解を深めなければならない。そして、実験的な授業を通じて、大人数でも実践可能な授業のあり方を模索していく必要がある。

また、本学では就職支援の一環として模擬試験や就職試験対策講座を実施しており、主に読み書きや計算力などの基礎的学力の向上を目指している。「学生の特性に適合した共同型就職支援システムの構築（平成21-22年度成果・評価報告集）」²⁴⁾によると、実施後の成績はおおむね向上している。漢字などの書き取りに関しては、講義内におけるレポート作成など、学びの中で身につけさせたいところではあるが、このような講座を別に設定し、内容や教授方法を強化することにより学生の基礎技能をさらに高めることができると言える。

Benesse 教育研究開発センター²⁵⁾によると、「コンピュータを使って文書・発表資料を作成し表現する」や「多様な情報から適切な情報を取捨選択する」技能は、大学での学習成果が高い項目である。しかしながら、本学の学生は、情報リテラシーに関わる技能に関して、入学時の習得度は低いものの、短期大学の学習等を通じて習得度が向上したとは認識していない。入学前の情報リテラシーの実態について、桑原・溝田²⁶⁾は、本学の学生が小学校から高校に至る学校教育の中で情報リテラシーの履修を終えており、そのツール群の利用を非常に自然な気持ちで受け止めながら体得していると述べている。山田・森²⁷⁾は、情報リテラシーに関わる技能は、正課授業を通じてレポート課題や論文作成に取り組む中で獲得されていくと述べている。本研究において、情報リテラシーに関わる技能は短期大学での学習成果があまり見られなかったが、それは、演習や実技の授業形態が多い保育者養成課程のカリキュラムの特性や、保育場面（保育技術や子どもとの関わりなど）と直結する内容に力点を置いて学習するという学生の学びの傾向性にも依拠するものかもしれない。

また、「健康」に関わる技能についても学生は習得度を高めた実感を得ていない。この点に関しては、「大学生の健康度および生活習慣は他の世代に比べて最も望ましくない傾向にある」とする徳永・橋本²⁸⁾の指摘と符合する。健康は、そもそも普遍的な価値を有するものだが、生活習慣病が懸念される現代の社会においてその価値はより貴重だと言える。しかも、近年における子どもの健康をめぐる諸問題は、痩身および肥満傾向児の増加、運動能力の低水準化、低体温、アレルギーなど枚挙に暇がない。したがって、将来、幼稚園教諭または保育士として子どもの健康教育に携わる学生には、健康に関わる

技能の習得が必要ではないだろうか。

本研究では、社会的・職業的自立に必要なと考えられる基礎技能および態度の全般について調査・検討した。今後は、幼稚園教諭または保育士に求められる基礎技能等が何なのかについて検証していく必要がある。幼稚園教諭または保育士に求められる社会的・職業的自立の基盤となる技能および態度が明らかになれば、本学を卒業するまでに身につけるべき技能等を学生に明示できる。結果として、学生は目指すべき保育者像を具体的にイメージできる。また、社会的・職業的自立の基盤となる技能等のうち、短期大学の学習で特に必要と考えられる技能等を一般教育科目（主に「あすなろう教育」科目群）の到達目標や学習内容に反映させることにより、一般教育科目はもとより、専門教育科目の学習成果の向上が期待できる。さらに、社会での就業に特に必要と考えられる技能等を専門教育科目の到達目標や学習内容に反映させることにより、保育の専門的知識・技能に加え、社会的・職業的自立の基盤となる技能や態度を兼ね備えた即戦力の人材を養成することができると考えられる。

最後に、本研究の結果は、学生の主観的評価による量的調査によって得られたものである。今後、学生に形成される基礎技能等については、より詳細に把握するためには試験等による客観的評価に基づいた調査も必要だと考えられる。

文 献

- 1) 文部科学省 (1998) 21世紀の大学像と今後の改革方策について。大学審議会答申, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/daigaku/toushin/981001.htm, (参照日 2008年7月)。
- 2) 文部科学省 (2008) 学士課程教育の構築に向けて。中央教育審議会答申, http://www.mext.go.jp/component/_b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afie/ldfile/2008/12/26/1217067_001.pdf (参照日 2011年3月)。
- 3) 経済産業省 (2006) 「社会人基礎力」～今、社会で求められる力～。 <http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/shiryoul.pdf>, (参照日 2011年3月)。
- 4) 厚生労働省 (2004) 「YES-プログラム」の概要, <http://www.mhlw.go.jp/houdou/2008/03/dl/h0321-1a.pdf>, (参照日 2011年3月)。
- 5) 池田孝博・田中麻里・四元博晃ほか (2009) 佐賀短期大学における初年次教育の取り組みとその評価—一般教育科目「あすなろう」への学生による授業評価から—。永原学園 佐賀短期大学紀要, 38: 13-18。
- 6) 野口美乃里・木村安宏・米倉慶子ほか (2010) 「2年生が1年生に教える」「1年生が2年生に学ぶ」教

- 授法の意義について. 永原学園 西九州大学短期大学部紀要, 40:71-80.
- 7) 文部科学省 (2008) 前掲.
- 8) 経済産業省 (2006) 前掲.
- 9) 厚生労働省 (2004) 前掲.
- 10) 濱名篤 (2010) 学士課程教育のアウトカム評価とジェネリックスキルの育成に関する国際比較研究. 平成 19-21 年度科学研究費補助金 基盤研究 (B) 課題番号 19330190.
- 11) 山田剛史・森 朋子 (2010) 学生の視点から捉えた汎用的技能獲得における正課・正課外の役割. 日本教育工学会論文誌, 34(1):13-21.
- 12) 山村滋 (2010) 高校と大学の接続問題と今後の課題 - 高校教育の現状および大学で必要な技能の分析を通して -. 教育学研究, 77(2):157-170.
- 13) Benesse 教育研究開発センター (2009) 大学生の学習・生活実態調査報告書. http://benesse.jp/berd/center/open/report/daigaku_jittai/hon/pdf/, (参照日 2011 年 7 月).
- 14) 池田ほか (2009) 前掲.
- 15) 野口ほか (2010) 前掲.
- 16) 林洋子・米倉慶子・櫻井琴音ほか (2008) 表現活動の実践力育成に向けての取り組み - 実技発表会の開催を通して -. 永原学園 佐賀短期大学紀要, 38:155-166.
- 17) 田村滋男・桜井琴音・田中麻里ほか (2008) 保育者を目指す学生と子育て支援 - 「親子いきいき広場」の教育効果 -. 永原学園 佐賀短期大学紀要, 38:167-175.
- 18) 中村多見 (2006) 保育学生の保育観 (1) - 保育者効力感の発達 -. 高松大学紀要, 45:197-206.
- 19) 石川隆行 (2005) 保育者を目指す短大生の保育者効力感について - 2 月の追跡調査より -. 聖母女学院短期大学研究紀要, 34:96-99.
- 20) 神谷哲司 (2009) 保育者養成系短期大学生の保育者効力感の縦断的变化 - 実習時期と就職活動を通じた進路選択過程に着目して -. キャリア教育研究, 28:9-17.
- 21) Benesse 教育研究開発センター (2009) 前掲.
- 22) 山田・森 (2010) 前掲.
- 23) 濱名 (2010) 前掲.
- 24) 西九州大学短期大学部 (2011) 学生の特性に適合した共同型就職支援システムの構築「文部科学省大学教育・学生支援推進事業」(学生支援推進プログラム) 平成 21 - 22 年度成果・評価報告集.
- 25) Benesse 教育研究開発センター (2009) 前掲.
- 26) 桑原雅臣・溝田今日子 (2010) 短大・大学生における情報スキルとリテラシー教育について (第 1 報) - どのように学習するかを学ぶために -. 永原学園 西九州大学短期大学部紀要, 40:41-50.
- 27) 山田・森 (2010) 前掲.
- 28) 徳永幹雄・橋本公雄 (2002) 健康度・生活習慣の年代的差異及び授業前後での変化. 健康科学, 24:57-67.